

禅と創造性

永田円了

～ 道元を裸にする ～

Zen and Creativity

禅を語る切り口はいろいろある。今回は創造性という切り口で切ってみよう。仏教では、本来万人が仏心をもって生まれてくるという。創造性も同様、生来のものである。では何故、人は悪事に手を染めたり、創造性に欠け、前例主義の習慣に縛られた行動をし続けるのだろうか。



800年前の道元も、疑問をもった。「本来本法性、天然自性身」、人間はもともと仏性を持ち、本来ほけであるなら、なぜ仏性を得るために苦しい修行をする必要があるのか。それではおかしい!

この疑問を解くために、命がけで正師を求めて旅にでる。さて道元は何を学び、この疑問の答えをみつけたのであろうか。

目的とプロセスを分けない

中国の宋に渡った道元は、天童如浄禅師のもとで大悟する。「仏性をもった者が、なぜ修行を・・・」との問いそのものがあべこべだったことに気づく。仏性を得るために修行、ではなく、「仏性があるからこそ修行ができるのだ」と。つまり、修行を仏性を得るためのプロセスと捉えるのではなく、「修行=仏性」の発想に至ったのである。ここでも発想転換の創造性がみられる。

座禅は随所、随所が座禅

「只管打坐」、これは道元禅の根本である。しかし禅堂できちんと座禅をしなければ、悟りを得ることができないのか、と道元は疑問をいやく。もしそうであるなら、一生田を耕す農民にはその機会がないのか。

如浄禅師が言った。「座禅は随所、随所が座禅」。たとえどういう場であろうとも、意識が自分の中心にあるならば、それは禅だ、と。

体操で田中三きょうだいがオリンピック代表に決まった。そのとき彼らの父親が励ますために言ったコトバに禅を感じた。「思い切って楽しんでこい」。思い(思考=マインド)を切り捨てて、本来の自分を楽しめ。これこそ日常の禅、このお父さんは禅師さんである。



問う自分から、問われる自分に

だれもが本来の自分になりたい。何がその行く手を阻んでいるのか。思考(マインド)である。自分の欲である。恐れである。この思考に乗っ取られた偽物の自分をエゴと呼ぶ(エックハルト・トル)。

行動がエゴを満たすためのものである限り、偽の自分の殻を破ることはできない。自分は将来こうになりたい、と人は願う。そのゴールにむけた努力とエネルギーはずばらし。しかし、禅ではそれをも否定する。

ゴールとは所詮、自分とゴールを分けて考える思考の産物、ここは永遠に満たされることはない。ではどうする。禅では次のように説く。

自分はこうになりたい(問う自分)という思いを、自分はこうならなければならない、畢竟、自分は人生からこうすることを望まれている(問われている自分)の意識に至ったとき、人は思考に邪魔されない、本来の自分を発揮する場を得る。自分の頭から発する思考という雲が消えたとき、仏性が自ずと現れる。

<事例>

井上ひさし作、蜷川幸雄演出『道元の冒険』

山田邦男、ピクトール・フランクルを語る NHK こころの時代より

柳沢桂子、生きたい自分から、生きねばならない自分に、

NHK「人間ドキュメント」 2/11/2001

尾崎豊、僕が僕であるために、問う自分だけで消滅

エリック・クラプトン、いとしのレイラ、Tears in Heaven

問う自分の20代から、問われる自分に成長

